

## コメントと総合討論

## 総合討論

司会(丸山): ありがとうございます。お二方の先生から、それぞれについて、あるいは全体にまたがったものも含めて、たくさんコメントをいただきました。ひとまず報告順に、まとめてリプライをお願いしてもよろしいでしょうか。だいたい1人5分を目途にお願いできればと思います。よろしくお願いします。

植田: コメントをありがとうございます。まだ消化しきれていない部分もあって、全部にはお答えできないのですが、答えられるものから順にお話ししたいと思います。

まず、檜村先生からいただいたコメントで、今日の報告のようなかたちで都市を捉えるときに、メディア空間の広がりやをどのように考えるのかということですが、Assemblage アプローチ、あるいはインフラストラクチャーやモノに注目した都市研究の前段には、都市はもはや場所に縛られなくなってきたという見立てがあります。メディア空間はわかりやすい例ですが、つまり、都市が場所から解き放たれていくなかで都市を捉えるなら、ヒトであれモノであれお金であれ情報であれ、むしろフローやモビリティに注目したほうがいいだろうという見立てです。しかし、それらがフローしていくときには、必ずそれを可能にするモノや装置が具体的な空間なり場所なりに埋め込まれていなければならないわけで、たとえばメディア空間といっても、どこかにアンテナが建っていなければつながらないわけです。そうしたところから、モノの集まりとしての都市が再注目されてきたという文脈があります。ですので、モノやヒトや知識から構成される集合体としての都市という対象設定には、都市がメディア空間にまで拡張されていることも既に織り込まれているというのが、ひとつ目のコメントへの回答になります。

2つ目に、地方の都市開発をどのように見るかですが、たしかに豊橋の状況は、今回の報告で前提としていた東京の状況とはかなり違っています。ただ、これは住まわれている方々からはお叱りをうけるかもしれませんが、たとえば豊橋のような地方都市における開発を、今敢えて都市という概念のもとで捉える必要が本当にあるのかということ、どうなのだろうという気もします。都市というのは、その時代その社会の最先端の動きが集約的・先鋭的に表れてくるところで——もちろん摩擦や矛盾も含めてですが——、そうしたものを捉えるためにこそ、他の場所との間に種差性を見出して都市として対象化することに意味があるのだとしたら、都市的生活様式が全面的に広がり、どここの地方都市も同じような街になってしまったと嘆かれるくらいには都市的空間が達成され、いわゆる「都市化」がある意味で行きつくところまで行きついた現在、敢えて都市という概念で括り出さなければ捉えられないような動きが地方都市で起きているかということ、どこでもがそうだというわけではないと思います。もちろん、東京のような巨大な都市でなくても、もっとコンパクトなところでも、都市として捉えることに意味があるところはあるでしょうし、極端な話、たとえば都市に住んでいた人が山のなかに移住してコミュニティをつくって、むしろそこでこそ都市的なものが純粋なかたちで表れるようなことがあったとしたら、それはまさに都市という概念で捉えるべきだろうと思いますし、豊橋についても、たとえば飯田線に乗って奥三河の方から降りてくると少し印象が違ったりもしますが、そ

れでも、今敢えて都市という概念で捉えることに本当に意味があるのはどこなのかということ、一度考えなければいけないように思います。

それから、ちょっと順番が前後しますが、町村先生からいただいたコメントの方にお答えしていきますと、金融化に関わる専門家は都市をつくる専門家のなかに絶対に位置付けなければいけませんので、これは大きな宿題とさせていただきます。都市のリアリティが情報に変換されてモノの形に至るプロセスには、たとえば都市計画の専門家が図面を引いたり書面を書いたりする以外にも、金融の専門家が数字を扱うプロセスも挟まっているはずで、金融に関わる専門知識も含めて考えなければ都市を捉えることができないというのは、その通りだと思います。また、上野さんがおっしゃっていたように、たしかに、それが見えない金融化にアプローチする回路になるかもしれないと今回あらためて思いました。ありがとうございます。

あと、少し話が逸れてしまいますが、都市社会学において中心的な研究テーマだったコミュニティをネオリベリズムとの関係でどう考えたらよいのか、特に空洞化するコミュニティを埋めるものとして何が考えられそうかという点ですが、これについては、これまで都市社会学がコミュニティのなかでこそ充足されるものとして想定していたものは、はたして本当にコミュニティによってしか充足できなかつたのだろうかといった点が気になります。都市においてコミュニティはいかに可能かというのは、いわゆる「都市化」にともなって、都市になることで失われた社会関係をどう回復するか、あるいは都市に未だ備わっていない社会関係をどう構築するかが問題となるなかで、都市社会学の研究テーマとしてせり出してきたのだと思いますが、そのとき、こうした社会関係のなかでしか充足できないと想定されてきたものの中には、もっと違ったかたちで満たされ得るものも含まれていたのではないかと。たとえば、Web 空間での匿名のやりとりによってかもしれないし、実はヒトを相手にしたやりとりに限定する必要もないかもしれません。あるいは、モノの配列の仕方によって予め充足できることもあるかもしれません。こうしたところに注目すると、コミュニティこそ都市を考えるうえで中心的なテーマであるはずだという前提自体を相対化できるのではないとも思います。都市のなかの特定のエリアを線で区切って研究対象に設定したり、そのエリアに暮らす人々からなるコミュニティがそこに成立していると想定したりすることが現実的ではなくなるなかで、コミュニティというものを従来とは違ったかたちでどう考えられるのかというのは、都市社会学や地域社会学が直面している課題だと思いますが、人と人との社会関係に注目するという縛りを敢えて解いてみるのが、何かしらのブレイクスルーになる部分もあるのではないかと気がします。

最後に、榎村先生のコメントに戻って、外国人労働者や Saskia Sassen のいう分極化といった問題を報告のなかでどう位置付けられるのかですが、こうした問題を提示されると、ヒトやモノや知識の編成として都市を捉えるといった議論をたてることに急に怖気づいてしまうところがあります。専門的な知識・技術の不均等な配分から様々なモノへのアクセス可能性の差も含めて、経済格差にとどまらない様々な格差が都市には厳然と存在し続けているわけで、こうした問題に焦点化するのであれば、政治経済学的な枠組みに依拠した方がよりクリアに事態が見えてくる気がします。そこに敢えてモノを持ち出してくる意味は何かと問われると、まだうまく説明できず、Assemblage アプローチを全面展開することへの躊躇いはこうしたところにもあります。このあたりについては今すぐにお答えできなくて、ひとまずここまでにしたいと思います。ありがとうございます。

平井: 平井です、ありがとうございます。町村先生と榎村先生のコメントには共通する部分もあったと思いますので、うまく個別に答えられるかどうかわかりませんが、私のやっているこ

とはどのようなことなのかと考えてみますと、「リベラルなものとか進歩的なものが持っているおぞましさにちょっと困惑する」ということをずっとやってきたような気がしています。ハームリダクションの研究に関しても、やはりそういうところがあるのだろうと思います。

ハームリダクションをめぐる全体の言説状況、特に日本における言説状況を考えますと、まさに樫村先生がおっしゃったように、リベラルな方が圧倒的に支持されていて、たとえば、オープン・ダイアログ、ユマニチュード、当事者研究などに対しては、非常に進歩的で新たな人間主義の潮流みたいなかたちで、左派の方を中心に支持が集まっています。もうひとつ付け加えるなら、これらはまだまだ体制化してなくて、むしろ犯罪領域や薬物領域で力が強いのは、いまだに厳罰化のモデルです。ハームリダクションなんて全然力が弱いわけで、左派がようやく言揚げをし始めました、という程度なのです。ですから、私のようなことをやると「なんでせっかく芽吹き始めた芽を摘もうとするのだ」などと言われるのですが、先ほど申し上げたように、進歩的なもの自体が持っている非常におぞましい部分が、やはり気になってしょうがないということがあります。

樫村先生のコメントは、そういったオープン・ダイアログ、ユマニチュード、ハームリダクション、ダルク、当事者活動といったものを、どのように評価すればいいのかということですが、先生自身が「個別の現場から」とおっしゃっていたように、個別だと思えます。今日の発表に戻して言うのであれば、あくまで統治性分析は、実践の経験的な分析が基礎にあると思っています。その実践のなかにどのような合理性があるのかということを経験的に抽出ないし分析するというやり方以外のものは、あまりイメージしていないんですね。たとえば、どこかでやられているオープン・ダイアログの実践を分析した結果、そこに新自由主義的な合理性が見いだされれば、そういうことでしょうし、おそらく、そうではないオープン・ダイアログの実践もあるでしょうし、ということなのだろうと思います。ダルクもハームリダクションもそうだと思います。新自由主義的なハームリダクションもあれば、そうでないハームリダクションの実践も十分に考えられるだろうというのが、私の立場です。「テクノロジー」「政治プログラム」「テクニク」といった言葉を使いましたが、そのようなもの自体を「新自由主義的だ」とか、「ネオリベリズムだ」と語る語り口をなるべく差し控えて、実践のさなかに合理性を見いだすというスタンスでいくのがいいのではないかなというのが、お答えです。

関連して、統治性論のハードルの高さについてどのように捉えればいいのかという町村先生のコメントですが、今言ったような個別領域の実践分析を主戦場に据えれば、はたしてそんなにハードルは高くなるだろうかという気がするんです。これは仁平さんがおっしゃったことへの批判なのかもしれませんが、経済全体がネオリベラル化しているとか、社会政策がネオリベリズムかどうかといった問題に立ち向かおうとするからハードルが高くなっているように見えるだけであって、たとえば私のハームリダクションの分析では、問題設定も分析対象もすごくシンプルですよ。それから、こうした個別領域の実践分析をベースとすることで、研究が含意する批判的インプリケーションもクリアで説得的なものとなりうる、ということも指摘したいと思います。私の今日の報告だと、「リスクな薬物依存者を排除しないでくれ」ということで、ものすごく明確なメッセージが出ると思うんですね。そういった側面ないしは位相で闘うことが、実は統治性論の本来とまで言えるかはわかりませんが、私がいいなと思うやり方です。日本では、酒井隆史さんや渋谷望さんといった統治性論を広めた先駆者の人たちが、どちらかといえば、社会のネオリベラル化だとか、非常に理論的思想的なレベルからネオリベラル化を語っていましたが、統治性論ってそういうものだというイメージがついているような気がします。私はどちらかといえば英語圏の統治性論を中心に見てきたので、都市関係もそうだ

と思いますが、非常に経験的な研究が多くて、個別のことをやっているの、逆にちまちました研究が多いと批判される側面が強いぐらいかなという気がしますので、ハードルの高さというのは、あまりピンとこなかったということです。

あと、外国人の問題にちょっとだけ触れると、最近、牛久の東日本入国管理センター、いわゆる「入管」ですが、不法滞在とされるような外国人の方々の拘禁が非常に問題化されています。最近すごく驚いたのは、あそこは刑務所ではないので、基本的に処遇や教育などはできないわけで、拘禁がメインです。そこで、非常に収容状態が悪いということで、虐待などの問題が出ているわけです。先日、法務省の方や法務省に助言をしている方と話をすることがあったのですが、かれらが「もう少し人間的な処遇を入れたらどうでしょう」「教育を実施したらどうでしょう」と「進歩的」な立場からおっしゃっていて、おぞましいと感じることがありました。似たような関心が、今日お話ししたホームリダクションについても、そしてそれ以外のいろいろなものに対してもあるということなのです。以上です。

仁平: まず、今日の私の報告で安倍政権をどう見るかですが、「ネオリベリズムではない」とは言っておりません。「定義次第です」と言っておりまして、第1のレイヤー・第2のレイヤーに注目しますと、オーソドックスなネオリベリズムからの偏差が大きくなるけれども、第3のレイヤー・第4のレイヤーから見ると、これはネオリベリズムだと言えるということで、どちらの観察に立つかということかと思えます。たしかに残業規制緩和はそうですが、ただ、同時に規制強化もあって、つまり、どちらも貫徹しない状態だということでは、やはりオーソドックスなネオリベリズムからの偏差という面はあるかと思えます。

もう一点は、別に、安倍政権を「ネオリベリズム」と呼ばないと批判できないわけではないということです。ファシズムとか、よりフィットする別の言葉で批判すればいいのではないかと思えます。そもそも、Michel Foucault にしても、Jürgen Habermas にしても、フランクフルト学派にしても、みんな主敵はかつての介入国家としての社会国家だったわけです。ネオリベリズム自体を敵手としなくてはいけない文脈は当然あるわけですが、だからといって、ネオリベリズムという言葉にかこつけないと対象を批判できないわけではないのかなと思えます。

厳罰化をどのように考えるかということですが、たしかに、ネオリベリズム中のネオリベリズムともいえるチリのピノチェト政権がそうですが、第三世界に対しては、自由なマーケットを強制的に創出するというので、それこそ血の流れるような厳罰を強いてきたと思えます。それは1980年代の世界銀行やIMF（国際通貨基金）に引き継がれていったと思えますし、それは非常に強い厳罰化で、その意味でネオリベリズムと厳罰というか強権は、非常に強く結びついていると思えます。酒井隆史さんや渋谷望さんが厳罰化とネオリベリズムをつなげて考えて理念型をつくっていきましたが、あれも、たとえばフィールドはニューヨークのハーレムだったり、本当にセキュリティと主体といろいろなものを一緒につくらないといけないというところで、警察権力と暴力が結びついたかたちでネオリベリズムが作動していたというケースだと思うんですね。ただ、第三世界に対する厳罰的な介入がそんなにうまくいかなかった1990年代以降は、ポスト構造主義アプローチというかたちで、フリーなマーケットを創出しようという点では一緒だけれども、もう少しコミュニティ形成や教育を中心としながらやっていくという「人の顔をした」ネオリベリズムの方が、より効果的とされていったわけです。つまり、ネオリベリズムの主目的である、資本が活動できるフリーなマーケットを世界中に創出するということは、厳罰化と結びつくこともあれば、ソフトな介入と結びつくこともあるということ、偶有的なところがあるのではないかと思えます。

安倍政権で報道の自由とか議会の民主主義がひどいというのは、それはそうなのですが、だとしたら、それはいろいろな意味でリベラルではなく、むしろ国家社会主義と同じ統治性のもとに置かれていて、それはそれとして批判する必要がありますが、ネオリベリズムを理論的に拡張しながら「それもネオリベリズムのひとつの表れだ」とまで言うことの理論的な認識利得はそんなに強くないのではないかと、別の角度で批判してもいいのではないかと考えております。

もうひとつは、町村先生のコメントですが、まず、コミュニティについてです。今日の報告のなかでも、安倍政権のもとでおこなわれていた「介護保険の軽いほうを地域丸投げ」ということに触れましたが、これは人類史的な転換だと私は思っています。つまり、これまではフェビアン協会など民間がやっていたものに国家が乗り入れるかたちで福祉国家を形成していったわけです。サッチャー政権のときでさえ、財政支出はそんなに下がっていません。ガバナンスのレベルでは大転換が起きていたわけですが、別に財政支出をやめようとしてカットしたわけではなく、その意味でロールバック型ネオリベリズムという評価は、サッチャーに対しては過大なところがあると思っています。財政削減という点ではそんなに成功していません。むしろ、安倍政権のもとで起きたことこそが不可逆的なロールバックで、これまで国家が担っていたものを「もう無理」というかたちで地域に投げ返して、しかも恐ろしいのは、そこにイデオロギーが見られないことです。「そのほうが効率的でうまくいくから」ではなく、「もう無理」という、神学もイデオロギーもないロールバックなんです。これが恐ろしいわけです。ですから、ネオリベリズムという神学やイデオロギーなどがセットで作動することなく、「これからは財政がないから、もう無理」というかたちでロールバックが進んでいくという意味で、これはネオリベリズムと似て非なるものなのかもしれないという気もしています。

外国人については、かつて経団連か何か「われわれは外国人労働力を求めて門戸を開いたが、外国人労働力は来なかった。来たのは人間だった」という言葉を言ったそうですが、おそらくネオリベリズムは労働力にしか関心がないので、そこだけを処遇するのがロールバック型だとしたら、おそらく、人間が来ることを前提に、困らないように社会のいろいろなことをちゃんと教えてあげよう、アクティブ・シチズンシップをきちんと身に付けさせようというのは、かなり教育重視で人的資本投資と整合的な議論だと思います。これはロールアウト型と言えるかもしれません。この2つに種別性を見るかどうかの違いであって、人間を対象に、アクティブ・シチズンシップを前提に、外国人にも教育をしっかりと手厚く受けさせるのなら、それはネオリベリズムではないと言うのか、あるいは、それもさらなる資本の実質的包摂の貫徹であるとみなして、それもネオリベリズムであると言うのかという違いだと思います。どちらでもいいですが、ロールバック型よりロールアウト型のほうが、まだましだと思っています。

最後に、ネオリベリズムへの対抗勢力ですが、これは Foucault の言う「どこでも抵抗は見いだせる」と重なると思いますが、人的資本の絶えざるバージョンアップを求めるのが主体レベルでの統治性のネオリベリズムだとしたら、それへの抵抗は、成長しないことではないかと思っています。時間とともに主体は何も変わらないという無為こそが、ハードルが高くなって個別に見いだせる、ある種の抵抗かと思っています。以上です。

司会: ありがとうございます。既に終わる時間を過ぎているのですが、フロアからもし何かあれば、お受けすべきかと思っています。こちらもお腹いっぱいかなという感じがありますが、もう一言という方がこのなかにもいらっしゃいましたら・・・よろしいでしょうか。

大変長丁場になりましたが、では、ここで「コメントおよび総合討論」を閉じたいと思います。本日はありがとうございました。